

## &lt;書 評&gt;

Elizabeth Taylor: *The Wedding Group*

(Chatto &amp; Windus, London, 1968) pp. 230

宮 井 敏

三人の娘達のそれぞれの家族を広大な田舎の敷地の中に住まわせて、家父長的に君臨している芸術院会員クラスの老画伯の孫娘のうちの一人が突然、篤信の家風に逆らって棄教を表明し、偉大な祖父の權威に対して公然と反旗をひるがえして、村の骨董屋に店員として住み込むが、夫に去られた母性的な母親をもつ近所の独身のテレビ・プロデューサーと結婚し、やがて子供が出来、若夫婦は母親を捨て、ロンドンへ出てしまい、祖父に柔順で敬虔だったもう一人の孫娘は老画伯の側近の伝記作家の私生児を産み、屋敷そのものも開発のあおりを喰って一家諸共集団で遠くへ移住してしまう、という云って見ればただそれだけの、筋らしい筋もない、淡々としたロンドン近郊の風物の淡彩のスケッチのような、いわばそんな小説である。それがこの春、作者の第十四番目の書物（短篇集、童話集を含む）として出版されて以来、どうして静かではあろうが作者 Taylor としては従来にない程の（厳密に云えば1958年の第九作 *The Blush, and other Stories* (Viking) の好評以来十年振りの）さわがれ方をしはじめたのであろうか。

一つには、たとえ長打は不得手であろうとも、処女作以来23年間、こつこつと自分の書きたいものだけを書き続けて来た、いわば、短打主義に徹して今日までやって来たということの集積的結果とも考えられようし、彼女のクールな文体が William Peden や Kingsley Amis など意外なところに根強いファンをもっていることも、今日のいかにも彼女らしい「静かなブーム」を呼んだ原因の一つに数えられよう。だが果してそれだけであろうか。Robert Granat はいう。「これはまさに配慮の行き届いた English tea であり、彼女自身、自分の fictional house の完璧なホステスなのである」と。(Saturday Review, April 6, 1968) またさらに、「興味本意に私生活の内幕を赤裸々書き立てたり、個人の privacy を平然と侵したりする傾向の一つい今日」、「自分自身の対象である 作中人物の側から一歩退いた形をとる節度ある彼女の態度は一服の清涼剤である」とも云っている。たしかに Angus Wilson も

云うように、(*Observer*, April 28) これは美しく語られたコメディであり、それも云うならば20世紀の *Comedy of Manners* であるとも云えよう。手馴れた文体、いきいきとしてユーモアにみちた会話、落ち着いた small informal party のように適度に入れまじる群像、などは読者をして決して退屈させないものであろうし、また彼女の固定読者層は今までのいくつかの作品と同じく、今度もまた「期待権を侵害」されることはまずないであろう。

ところが誠に残念なことには、ただそれだけなのである。イギリスの *Novel of Manners* の伝統において彼女は、witty で、poetic で、ironic で、些か tweaking であると、それだけ云ってしまえば実は彼女とこの作品の魅力はすべて云いつくされたことになってしまうのである。fiction とは云っても筋らしい筋がある訳ではない。冷静な客観的態度といっても、対象を突き放す無慈悲な非情さに徹しているわけでもない。*Novel of Manners* の系譜に連らなると云い条、多様な現象を皮相下に切る鋭い観察があるわけでもない。いくつかのさして重要でもないロンドンの風俗をのぞけば、はげしくゆれ動く現代イギリス社会の topical allusions もなく、さりとていつでもよい、歴史のある部分を切りとって見せようという超時間的な人間社会の類型化があるわけでもない。あるのはただ積極的意欲もなく淡々とくらしている人々の静かなお茶の時間の会話だけということになるのである。

私は何もここでこの作品を含む彼女の連の novels of manners における徹底した「政治不在」を問題にしようというのではない。そのこととはかかわりなく、*Novels of Sensibility* の大家だとか、Jane Austen にも比すべきすぐれた style だとか、いろいろ云われはしても、所詮これは minor な作品であり、そのトップであろうかも知れぬが彼女はやはり minor writers のグループに入れるべき人であるようにおもわれる。事実、十年も前から R. D. Charques はその構成力の脆弱さを指摘していたし、*Books and Bookmen* の書評子のように、「彼女の才能は惜しくも浪費されている」と云った人もある。undramatic な状況のもとでの一つの drama を追求するといったところで、所詮は緊縮した一つの内的必然が driving force として作家を駆り立ててこそ、作品としての積極的意味もあり、説得力もまた出て来るというものだからである。このことの不在は決して美しい style と手馴れた会話だけで補えるものではない筈であろう。

ところが実際問題としては、このような讃辞と批判はいずれとも彼女にとっては迷惑なことなのかも知れない。「まことにイギリス的な状況を背景として、まことにイギリス的な人物が活躍しはするが、実際問題としては殆ど何もおこらない」というような小説をずっとかき続けて来た作者にとっては、この十年振りのスポット・ライトは些かその志に反するものであり、まして、その好評に対する反論としての批判に到っては、誠に迷惑至極、「そんなことは始めからわかっていた」こととして「今更何

を……」という気がするのではなからうか。だとすれば、罪はもち上げた Angus Wilson であり Robert Granat であるということになる。たしかに昏迷する現象を描く文学自体がまたその昏迷の一部になってゆくような、さきくれ立った神経を殊更にまたかき立てるような作品を立てつづけによまされたあとでは、これはまさに、well-prepared English tea であるという気がしはするのである。だがそれとこれとは別のものであって、所詮 tea は dinner ではないのだとしか言えないのではなからうか。今日時おり見られる Victorianism は実は偉大なりしイギリスの過去への郷愁に外ならないのだという Rubin Rabinovitz の見解はしばらく措く。(Rubin Rabinovitz: *The Reaction Against Experiment in English Novel, 1950-1960*, Columbia University Press,) 前衛的な実験の試行錯誤のはてに、伝統的な手法への回帰がこうしてあるのかどうかということよりも、問題は、この程度のものがどうして騒がれるのか、今日のイギリス文学にはいづれにもせよこの程度のものしかないのかという気がしきりにしてならないのである。

(追記) 題名の “Wedding Group” というのは作中散見するように (p. 62, p. 104, p. 137, p. 215) Wedgewood という有名な陶器メーカーの図柄であり、結婚式後のつどいをあらはしている (p. 136)。また、事実この作品の中では結婚は David と Cressy の結婚式一回きりである。従ってこの作品を紹介した日本の(朝日ジャーナル、文化ジャーナル欄「イギリス小説の問題」1968, 6, 23.) 記事にある「結婚するグループ」という訳はこの作品をよまないで書評した結果ではなからうか。

(ロンドンにて、7月20日)